



JSPS、JST などの審査や学術会議で仕事に追われ、目の前の仕事を片付けるだけで汲々とした毎日であった。Pat からもらった人生訓を思い出す余裕は、全くなかった。そして現在、ラボは撤収したものの、貯まり貯まったデータの整理がまだまだで、目の目を見るようになるまで、勤務時間外の多くが論文書きにあてられそうである。

それでは、勤務時間内に何をしているかという、長年思い描いていた定年後の夢とは裏腹に、2年前より数十年ぶりの臨床医をしている。リズム研究の出口はヒトの健康やリズム障害の治療であり、これまでの研究成果を社会還元できれば、うれしい限りである。札幌花園病院に開設された睡眠専門外来で、第二の人生の出発となった。この間、経年変化の著しい脳細胞をフル回転させて最新情報を学ぶだけでなく、かつて「新人」臨床医だった頃には気にする必要もなかった収支バランス、診療報酬の改定など、論文作成や研究費獲得とは 180 度異なる能力が必要とされる医療現場で、右往左往している。睡眠医療はまだ発展途上にあるのと、外科医の様な技術が不要であることから、頭でっかちな基礎研究出身者でも何とか足掛け2年、臨床を続けることができた。ただし、生身の患者さんは、実験動物のように動いてくれない。起床時に高照度光を当てればよいことが分かっている、非 24 時間睡眠覚醒症候群の患者は、思う様に光を浴びてくれない。火曜から土曜まで、毎日の外来と週3回の検査入院対応で、現役教授の時よりも、自由の少ない身となったが、論文書きと臨床という二足の草鞋で毎日が過ぎるため、まだ、定年後の夢に手がとどかないでいる。

